

歩みは力強く

運動評価「背中押された」

日本原水爆被害者団体協議会（被団協）にノーベル平和賞授与が決まった瞬間、広島市の平和記念公園では十数人が集まって静かに手を合わせていた。「本当にうれしかった」「核兵器をなくしてほしい」「平和記念公園を家族で訪れてみたい」と、発表の知らせが伝わり、被団協の代表者らから涙が溢れ、先人の苦難に思いをはせ、核兵器のない世界を願った。



広島市の平和記念公園にある原爆型資料館の写真を待ち受け画面に設定したスマートフォンを掲げる日本被団協代表理事の木村綾子さん＝11日午後、仙台市

「二ホン」ヒタンキョウ。午後6時過ぎ、広島市役所内で発表の様子をスマートフォン画面で見ていた広島県原爆被害者団体協議会の救済部理事（82）は椅子から立ち上がり、涙に濡れた。「私たちが生きていくうちに核兵器をなくして欲しい」と涙を浮かべながらつぶやいていた。

川野さんは「核兵器に対する禁止運動が評価された。ウクライナや（パレスチナ）ガザで悲惨な歴史を繰り返されていることに対する一つの警告だ」と強調。「運動をもっと強めていかなきゃならない。先人たちの背中を押された。80年となる来夏、広島市の父の日に、報告しようと思ふ」としみじみとした様子で話した。

今夏、国連欧州本部に核廃絶を訴える署名を届けたいと決意を述べた。広島県出身で中学生の頃から反核平和運動に取り組み、2年沖本晃樹さん（16）は被団協のノーベル平和賞授与を喜んだ。被団協代表理事を務めた故坪井直樹さんに思いをはせた。「世間で核兵器がなくなると言われるが、坪井さんはこの受賞を機にもっと頑張らなければならぬ」と思うのでした。

市役所で広島県原爆被害者団体協議会の救済部理事の世代や、若い世代が何をすべきか問われている。核廃絶への取り組みを加速させていくには、と力を込めた。

甲斐なつさん（17）は「核兵器が一度使われれば、平和と安全はもうない。全国の高校生から選ばれている。27代目となる今年は、本県から2人が選出された。」



2016年5月、広島市の平和記念公園でオバマ米大統領と握手する坪井直樹さん

「生き証人」願い継承へ

被団協の被団協者は「生き証人」として核廃絶運動を先導してきた。だが、平均年齢が85歳を超える被団協では17年（山口）被団協の若者がいなくなる日は、そう遠くない。平和のバトンを子孫や市民に託す取り組みが進んでいる。

「いつか証言する被団協者の数は減っていく。原爆の惨害を後世に語り継ぐため、広島市は「被団協体験伝承者」と「家族伝承者」の養成事業に取り組み。9月末時点の大統領は2016年5月、

被団協の話を聞き、伝える訓練を積んだ延べ264人が活躍している。家族伝承者として昨年から活動を開始した広島市の会津屋形屋健斗さん（33）は、16歳で入市被爆した祖父松原昭三さん（95）の体験を語り継ぐ。「少しでも平和に近づけるように、考える人を増やそうと、被団協世として広島に生まれた者が、重要になってきている。」

生き証人を後世に残したい」と話す。長崎市の14年度から被団協者の家族を対象に同様の取り組みを始め、16年度からは一般市民にも枠を広げた。

「数十年前、数百年先に伝えられるように担い手を増やさないといけない」と語り、被団協に加わる団体の多くは高齢化のため会員数が減り、解散する団体もある。被団協2世、3世と継がれる子や孫による活動が、重要になってきている。